李白の庶民的性格

片　岡　政　雄

Li-Bo, a poet defying the Intelligent people

Masao KATAOKA

ここに提起した庶民的性格とは一体何か．説明の順序として先ず庶民を規定せねばならぬ．思うにこれは政治的にも社会的にも文化的にもはたまた時代的にも非常に広い幅をもつた階層で，一言にして定義づけることは至難であるにしても，一般的には貴族・軍閥・官僚と言つた権力を主体とする治者階級・特権階級とこれに協力追随する士階級すなわち知識階級などに対して，市井の人民，主として農工商階級として了解される[1]．要するに庶民という概念は支配される側に立つから時勢によつては，その外延に多少の伸縮があるにしても，李白の時代における庶民は以上のようなものであると考えられる．

そこで庶民的性格であるが，これは庶民が庶民として支配者に異る本質的性格でなければならぬ．もちろん庶民とは言つても，広く人間性には変りないはずであり，またその個々の性格は人によつて異り，時にはまた複合して現れるから，一口に庶民的性格をきめる事は至難である．たゞ長い歴史における人間社会の構造様式或いは因襲的風俗習慣が，支配者と被支配者との間に自ずと異る一般的性格を形成したことは否めない．

ところで一般的性格とは何か．庶民はやゝもすると田夫野人の語を冠せられる通り，知識層に比し物の考え方言い方に技巧洗練がなく，至つて素朴粗野である．つまり直情径行的性格と言うことになる．この直情径行と言うことはもちろん知識層のように学問的教養を得る機会に恵まれず，したがつて栄達を求めるための策略・欺瞞の下心，換言すれば虚飾がないためで，本来愚昧だと言うのでは決してない．否その思考や言語行為はじかに人間性に基づいて居るがため，往往にして逞しい知慧の新鮮な閃きを現す．それゆえ万事虚飾に停滞し勝ちな支配者階級には，胸を抉る程に警抜な諷刺ともなり得ること今も昔も変りない．しかしこれが一たび自我の覚醒を経ると鋭く支配者階級に対立し，彼等に対する対等意識・反撥抵抗の意識となる．洋の東西を問わず近代における庶民勃興の歴史的必然はこれを足場にしているのである．してみれば庶民が庶民として支配者に異る本質的性格すなわち庶民的性格とは実にこうした意識を性格的に具有することに外ならない．

それでは李白を生んだ唐時代における庶民階級の様相は如何なる段階に達して居たであろうか．

さてこの時代は文化が一時に興隆し，その機構制度の上にも見るべき改革が行われた．官吏登用法である科挙制度の確立もその一つである．元来これは六朝時代の貴族門閥を尊ぶ九品中正を廃した隋の制度を継承したものであるが，理論的には庶民にも一応その門戸を開いた形のもので，こゝ

1） 仁井田陞博士著中國法制史「第七章身分制度——特に奴隷——」を參照した．士庶奴隷の關係が説明されている．

に庶民を無視し得ない時代的動向が看取される．しかし結果的にはなお貴族門閥を尊重する旧習が改まらず，庶民への道は依然として鎖ざされたも同然であつた[1]．

それゆえ李白の主として活躍した玄宗の開元天宝時代は貴族が政治の実権を掌握して，安逸の気風がこの階層の上下に滲透し，文化は既に爛熟頽廃の様相を呈したのである．一方庶民階級はその抑圧下にあつて重税と徴発，或いは天災や米価騰貴に呻吟したことは彼の詩にも見えて居る通りである[2]．それゆえ，これまでもしばしば問題になつた流民の一層増加した事は言うまでもなかろう．天宝の末年安祿山が反乱を起して，その勢が猖獗を極めた理由の一端もこうした流民の荷担にあつたらしく，かくて貴族階級は忽ちに無力窮乏のどん底に転落し，明日の食にも事欠く悲惨な状況に陥つたことは杜甫の名篇「哀王孫」[3]のよく描くところである．眼前のこの事実は従来専ら隔絶したものと観ぜられた貴族特権階級も庶民と同一線上にある一個の人間に過ぎないことを覚知させる以外の何物でもなく，思うにこれを契機に時代の進運とともに漸次芽生えつゝあつた時代的動向としての庶民意識が，あるいは明確にあるいはおぼろげに，その差はあつてもより多くの人民に自覚されたであろうことは理の当然である．安祿山の乱の社会的影響の重大さは，このような意味で捕えられるが，後に行われる税法の改革にしても，藩鎮の強大にしてもこれと一連の関係をもつて，庶民勃興の時代と目せられる宋代を迎えたのである[4]．かく見れば安祿山の乱を前後にした社会状勢は庶民の自我意識を覚醒させるに十分な温床だつたわけである．

さて李白が反乱勃発後，江夏の太守韋良宰に贈つた詩[5]の一節に

「十月到幽州，戈鋋若羅星，君王棄北海，掃地借長鯨，呼吸走百川，燕然可摧傾，心知不得語，却欲棲蓬瀛」

と歌い，安祿山の幕下を訪れて，既にこの事あるを予知した言い振りになつて居る．後年彼が永王璘の反乱に連坐[6]したのは別として，この詩や郭子儀を見抜いた話[7]などからすれば，人の動きを察するに可なり敏感な面がある．つまり長い流浪の旅に得た経験の一つでもあろうが，こうした敏感さが独り時代動向たる庶民意識に向わないはずがない．

かく観ずるとき当然彼の作品なり行為なりにこの意識が具現されるはずである．しばらく彼の作つた月や閨情の詩を中心に見解を述べよう．

李白の作品には月を詠出することが比較的多い．中でも月を君と呼びかけた「峨眉山月歌」[8]，酒杯を挙げて明月をむかえ，我が影に対して三人となると興じた「月下独酌（四首中の第一首）」[9]，青天に月あつてこのかた幾時経たことか，わたしは酒杯をとゞめて，一たび月に間うてみると吟じ

1） 史林第九巻三號所載，宇都宮清吉氏「唐代貴人に就いての一考察」を參照した．貴族門閥と士庶との關係が說かれている．

2） 李太白文集輯註卷十二「書懷，贈南陵常贊府」．

3） 杜詩詳註卷四．

4） 內藤虎次郎博士，中國近世史の「第二章貴族政治の崩壞」を參照した．
和田清博士，中國史概說上の「第十二章隋唐時代の文化」中に「制度と社會」の項があつて隋唐における民間の自治制度の發達を述べているが，時代動向を知る一資料だと考える．

5） 「經亂離後，天恩流夜郎，憶舊遊書懷，贈江夏韋太守良宰」，分類補註李太白詩卷十一の楊齊賢の註，李太白文集輯註卷十一の王琦の註，唐宋詩醇卷五の乾隆御批を參照するに，すべて安祿山の狀況を歌つたものと解している．なお李白が安祿山を訪ねた事については，田中克己氏著「李太白」中の「失意十年」の項に考察が載つている．

6） 舊唐書一百九十文苑下・新唐書二百二文藝中．

7） 新唐書二百二文藝中．
李太白文集輯註卷三十一「李翰林別集序（上柱國樂史述）」白嘗有知鑒，客幷州，識汾陽王郭子儀干行伍間，爲脫其刑責而奬重之，及翰林坐永王之事，汾陽功成，請以官爵贖翰林，上許之，因而免誅，翰林之知人如此，汾陽之報德如彼．

8） 李太白文集輯註　卷八．

9） 同上卷二十三．
唐宋詩醇卷八「陶潜云，揮杯勸孤影，白意本此」．また李太白文集輯註卷二十三「獨酌」に「獨酌勸孤影」とある．唐宋詩醇卷八に「間適諸篇，大概與陶近似，非有意擬古，其自然處，合以天耳」と言つている．

た「把酒問月」[1]などは，いずれも珠玉の名篇であるが，人の意表を衝く非常に変つた表現である．しかし峨眉山の月に心引かれてつい君と呼びかたた心根は，もう一つの「峨眉山月歌」[2]がこれを明かにしてくれる．これには蜀僧の晏が中京長安に入るのを送ると言う小題がついていて，「あなたが都に入つて名声を博した上は，さつと帰り来て峨眉山の月を賞せられよ」と言つた述べ方で，しんみりした言いおさめになつている．これによれば李白の心底に映ずる峨眉山の月は権勢栄誉にいつまでも恋恋と拘泥する俗物の解し得ない存在であることは明白である．したがつてこれら権勢栄誉から解放された自由人にのみ親しまれる存在で，それが孤高の心を支える生きた友とまでに観ぜられているようである．そしてその高められたひたむきな親近感こそは君と言う呼びかけに外ならず，「月に問うてみる」とか，「月をむかえ影に対して三人となる」とか詠ずる心中に揺曳する情も明かにこれである．この異常とも見える親近感の基づくところを察する例としては，別に「古朗月行」[3]が挙げられる．これには彼がまだ幼くて月の何たるかを知らない頃，白玉盤——白玉の大皿と呼んだものだと歌い，更に続けて，仙女が両足を垂れていると伝えられる月中のくもりに心引かれたこと．月中に生えていると言う桂に思を馳せ，まん円い月を不思議がつたこと，はては月中で薬を搗いていると言う白兎に向い，誰とともに飲もうとするのか問うてみたことなどが述べられ，殊にも童心の素朴な問いかけが優雅な伝説の織り成す情緒によく融け込んで，心引かれる歌となつている．思うに童心の発露は元来素朴清純で権勢も栄誉も遠く離れた世界にのみ存するものである．ところが社会の現実に照して権勢や栄誉に隔絶した階層を挙げるならば，それは明かに庶民であり，最も素朴なだけに童心との繋りも最も密な関係にあると言わねばならない．かく観れば李白の月に対する親近感の諸詠はいずれも彼の胸臆に潜在する素朴な庶民的生活感情の流出に外ならず，その意表を衝く諸表現もかゝる素朴に内在する新鮮さの再認識で，ことさらに作為された形跡を止めないのも，実はこうした理由による．

以上は月に表現された親近感より，彼の胸臆に潜在する庶民的生活感情の一面を指摘したに過ぎない．次にある種の閨情の詩になると明かに抵抗意識が伴い，彼の庶民的性格の具現とみなされる．

閨情の詩もまた李白の好んで歌つたものである．「長干行二首」[4]「江夏行」[5]などは行商のため船出したまゝ久しく帰らぬ夫を待ち佗び怨慕する情を歌つたものである．「独不見」[6]，「春思」[7]「秋思」[8]「子夜呉歌（四首中の第三・四首）」[9]などは征戦に徴発さたた夫を思慕する妻の切ない情で，事例はたゞこれだけに止るものではない．これらはいずれも庶民階級の弱い婦人に寄せたものであり，殊にも後者に属する歌は戦に苦しむ庶民の悲歎で明かに権力者を諷刺する響を持ち，より深く庶民の生活感情に割り込んだ作と見て差支えあるまい．ここに諷刺する響があると言うわけは，閨情以外の詩を見ても庶民を戦争に駆り立てる権力者に対する批判が極めて深刻だからである．「高邱に登つて遠海を望む」[10]と題する詩の後半に

「……君不見，驪山茂陵尽灰滅，牧羊之子来攀登，盜賊刼宝玉，精靈竟何能，窮兵黷武今如此，鼎湖飛龍安可乗」

1) 李太白文集輯註巻二十．
2) 同上巻八　「峨眉山月歌，送蜀僧晏入中京」
　····一振高名滿帝都，歸來還弄峨眉月．
3) 同上巻四　「小時不識月，呼作白玉盤，又疑瑤臺鏡，飛在青雲端，仙人垂兩足，桂樹何團團，白兎擣藥成，問言與誰餐，····」．
4) 同上巻四．
5) 同上巻八．
6) 同上巻四．
7) 同上巻六．
8) 同上巻六「秋思」と題して「春思」の前にもあるが，これは「春思」の後に續いて出ているものである．すなわち「燕支黄葉落，妾望白登臺，海上碧雲斷，單于秋色來，胡兵沙塞合，漢使玉關回，征客無歸日，空悲蕙草摧」と詠じた詩であつて，詩体は五言律をなしている．しかし分類補註李太白詩では巻六樂府の中に收められている．
9) 李太白文集輯註　巻六．
10) 同上巻四「登高邱而望遠海」．

と秦の始皇帝・漢の武帝の広大な陵墓に羊飼いの牧童がよじ登り，盗賊が宝を持ち去るも如何ともなし能わざる精霊に対し，窮兵黷武の報いに帰して一片の同情も見せない精神などはその一例である．

ところで前記の諸詠は従来も勿論楽府体の詩に見られる例であるから，必ずしも特異の作風とも言われないようではあるが，李白その人の歩んだ道や歌いぶりの示すところでは，単なる観念的詠出とは考えられない．いま侍御の崔四を訪れた時の詩[1]を見るに，これは月の一夜を飲み明し，興のむくまゝに翌晩に達し，酔客相誘い船を浮べて崔四を訪い，更に翌日に及ぶ酒仙の一側面を述べたものである．中に船中の描写として呉の美人連が簾を捲き上げて，こちらを揶揄したと詠じている．美人連はもちろん妓女であろうが互に揶揄したものに違いなく，妓女の金陵子を主題にした詩[2]があるのも，こうした生活の間に詠ぜられたものと察せられる．そして妓女に対する態度も，その艶麗を讃え歓楽の気分に浸るばかりだとは思えない．段七娘も恐らく妓女であろうが，これに贈つた詩[3]には薄絹の足袋を穿く歩みのえも言われぬ様を称え，だが籠の鳥の悲しさに恋しい情人を訪ねるすべもないと深く同情している．その他，彼には自分の妻を主題に詠じた詩[4]が数首見える．それには真面目に或いは諧謔的に一貫して妻の待ち佗びる心に対する同情が流れ，その陰には自己を責める声が秘められて，明かに庶民の妻を歌う諸詠と相通ずるものがある．こう考えると庶民の妻に対する同情にこもる諷刺は，主として流浪の旅を続けて得た生活感情の現れで，一応楽府と言う古い形体の例をとるにしても，たゞ旧習に泥み修辞的技巧的に美辞麗句を弄して観念的に詠出されたものとは些か類を異にする．そして今日なお名作として，もてはやされるものの中にかゝる庶民的生活感情の濃厚な詩が少くないと言う事実は，もつと根本的に遡れば，彼の庶民的性格の反映にほかならず，またその詩が永遠の生命を持続する一つの大きな理由だと思う．

以上は李白の月及び閨情を題した詩より私の受けた第一印象で，実のところ本稿を思い立つた動機でもある．そこでこれから主として伝記の跡をたどつて，庶民的性格がどのように発揮されたかを究明しよう．

李白の伝記を読むに常軌を逸し，人の意表に出る行為が少くない．新唐書[5]には，彼が四川に居た時の動静を伝え，長じて岷山に隠れた当時，州の長官が彼を有道科に挙げたけれども応じなかつたことが見える．有道科は例の官吏登用試験であるが，これに推挙されるのは，当時の知識人の最も栄誉とするはずのものであるにもかかわらず，これに応じなかつたと言うのは如何なる了見であるのか，これだけでは無論分らない．しかし後年彼が安州の裴長史にたてまつた書[6]の中で，昔逸

1） 李太白文集輯註巻十九　「翫月金陵城西孫楚酒樓達曉，歌吹日晩，乘醉著紫綺裘烏紗巾，與酒客數人棹歌，秦淮往石頭，訪崔四侍御」「昨翫西城月，青天垂玉鉤，朝沽金陵酒，歌吹孫楚樓，忽憶繡衣人，乘船往石頭，草裹烏紗巾，倒被紫綺裘，兩岸拍手笑，疑是王子猷，酒客十數公，崩騰醉中流，謔浪棹海客，喧呼傲陽侯，半道逢吳姬，卷簾出揶揄，我憶君到此，不知狂與羞」．

2） 同上巻二十五　「示金陵子」「出妓金陵子，呈盧六，四首」．

3） 同上巻二十五　「贈段七娘」國譯漢文大成，李太白集巻二十四に久保天隨博士は段七娘を「蓋し妓流であつたらうと思はれる．」旨推定している．

4） 同上巻二十五　「別內赴徵三首」「秋浦寄內」「自代內贈」「秋浦感主人歸燕寄內」「送內尋廬山女道士李騰空二首」「贈內」「在尋陽非所寄內」「南流夜郎寄內」．特に強調すべきものは「自代內贈」と言う型の變つた詩で，久しく夫に別れている妻の傷心の情を自分自ら妻に代つて詠じたものになつている．

5） 新唐書二百二文藝中．

6） 李太白文集輯註巻二十六　「上安州裴長史書」註によれば胡應麟が續筆叢において，これを僞書としたに對し王琦は反駁している．「‥‥又昔與逸人東嚴子，隱于岷山之陽，白巢居數年不跡城市，養奇禽千計，呼皆就掌，取食了無驚猜，廣漢太守聞而異之，詣廬親覩，因擧二人以有道，並不起，此則白養高忘機不屈之跡也，‥‥」．なお東嚴子については國譯漢文大成本李太白集の「總說」，田中克己氏李太白の「遍歴時代」にも同じく東巖子とある．しかし繆曰芑李太白全集本にも東嚴子とあるから恐らく筆寫の誤ではないだろうか．

人の東厳子と岷山の南麓に隠れた時，広漢の太守が有道科に挙げたけれども応じなかつたと言い，

「……広漢太守聞而異之，詣廬親覩，因挙二人以有道，並不起，此則白養高忘機不屈之跡也……」

と述べてその応じなかつた理由の根本原因を高志を養い，たくらみを忘れ，権貴に屈しない精神に帰しているのである．これが彼の権力に対する抵抗として，第一に注目されることではなかろうか．唐詩紀事[1]に彰明逸事を引いて李白の戴天大匡山に隠棲したことを伝えているのも，この時代と察せられるが，その後もたびたび山に隠れた胸臆には恐らくこうした精神が潜在したものであろう．新唐書[2]にはその後に続いて，

「蘇頲為益州長史，見白異之曰，是子天才英特，少益以学，可比相如，然喜縦横術，撃劍為任俠，軽財重施」

と述べ，蘇頲が益州の長史になつた時彼の天才を認め，もう少し学問を深めたら司馬相如にも比肩出来ると言つたのに対し，彼は縦横の術を善び撃劍をし任俠の行をなしたと伝えている．蘇頲の勧める学問は主として当時の知識人の間に重んぜられた経書を指したものであり，司馬相如は蜀の成都から出た漢の武帝時代における大文人である．かく観ると蘇頲の真意は土地の先輩の後継者として大いに彼の前途を属望し，これに激励を与えたものであろう．かゝる際彼の進んだ方向を考えるに，撃劍をするのは司馬相如にも若い時経験があつたと言うから暫くおくも，従横の学や任俠は蘇頲の激励とは全く背馳した修業で奇異の感を受ける．ところで先にも挙げた彰明逸事[3]には，

「……太白恐弃去．隠居戴天大匡山，往旁郡，依潼江趙徵君蕤，亦節士，任俠有気，喜為縦横学，著書号長短経，太白從学歳余，去遊成都，……益州刺吏蘇頲見而奇之，……」

と蘇頲に会うまでの経歴が載つている．これによれば李白が戴天山に隠棲した時，縦横の学をなす趙蕤について一年余も学んだことが分る．現に新唐書芸文志[4]に長短経十五巻の著者として趙蕤の名が載つており，且つ開元年間召されたけれども赴かなかつたと記されている．李白の集中には彼が淮南で病の床に臥した時趙蕤に寄せた詩[5]が見え，懐旧の情豊かな点から察するに彼と気脈相通じた人物である．してみれば彼が縦横の術を喜ぶと言うのは趙蕤について得たものであることを物語つて居る．蘇頲と言えば宰相の履歴をもち張説とともに燕許の大筆として官爵文名ともに一世を風靡した大人物であるのに，その期待に添わなかつたのは，徵士たる趙蕤の学問や行為に同調して，岷山に隠れた時と同様に権貴に屈しない精神をいやが上にも燃したものであろう．

以上の事実はみな彼が四川に送つた人生の門出とも言うべき二十代の話であるが，この時にして既に山に隠れたり，地位ある人々の推挙に応ぜずして期待に添わない態度には，単なる豪放磊落，不羈奔放の面だけでは到底解し得ないものがある．これはつまり彼のいわゆる「権貴に屈しない」という抵抗意識が彼の性格にまで高められたことを意味するものではないか．

四川を離れた後，玄宗に仕える迄の動静には種々の曲折があつたけれども，新旧両唐書[6]には，山東の徂来山に隠れ，孔巣父・韓準・裴政・張叔明・陶沔等と飲酒放吟し竹溪の六逸と称せられるまでの親交を結んだこと，次に浙江に出て剡中に道士呉筠と共に隠れたことの二つを伝えるに過ぎない．王琦の年譜[7]では三十五才から四十二才に至る間の出来事になつているが，四川時代における性格と別段に変つていないように考えられる．「五月東魯に行き汶水のほとりの老翁に答えて」と題する詩[8]はこの頃の心境を知る一資料と思われるが，先ず魯国の叙景に始まり，次に

1）唐詩紀事第十八　「李白」‥‥「東蜀楊天惠彰明逸事云，云云」．

2）新唐書二百二文藝中．

3）唐詩紀事第十八　「李白」‥‥「東蜀楊天惠彰明逸事云，云云」．

4）新唐書藝文志「趙蕤長短要術十五巻，字大賓，梓州人，開元召之，不赴」．

5）李太白文集輯註巻十三　「淮南臥病．書懷寄蜀中趙徵君蕤」．

6）舊唐書一百九十文苑下，新唐書二百二文藝中．

7）李太白文集輯註巻三十五　「李太白年譜」．

8）同上巻十九　「五月東魯行，答汶上翁」．

「顧余不及仕，学剣来山東，挙鞭訪前途，獲笑汶上翁」と仕官せず剣を学ばんとはるばる山東に来たところ，汶水のほとりに住む老翁に笑われたと言う意を述べ，続いて老翁の言葉として

「下愚忽壮士，未足論窮通」と笑う理由を明かにしている．つまりお前は下愚なる故こんな壮士になつたのだ．こんな壮士とは人の世の困窮も栄達も論ぜられるものか．お話にならぬという意になつている．これに対して李白は

「我以一箭書，能取聊城功，終然不受賞，羞与時人同」と魯仲連のように戦わずして敵城を抜き取り得る自信を示すとともに，賞を受けずして遁世し世人と同調しなかつた行為に熱烈な讃仰希求の程を示して答え，かくて最後の結びとして西長安に向う心境を披瀝している．恐らくこの老翁は儒学を重んじているらしく，撃剣を学び，はては魯仲連のような壮士を慕う李白の不心得をたしなめたのは当然の帰結と言えよう．しかしなおこれに承服せずして魯仲連を称える彼の心境は大功を立てた点にのみあつたのではない．実のところ恩賞を受ける下心が更になく，世を逃れた高風がより強く刺戟しているようで，これは時の権力に阿附追随する人間に対して示した抵抗の一端と受けとられる．

要するに壮年期を迎えた李白には，ここに示された如く都に出て仕えると言う心境にまでは立至つてはいるが，その抵抗意識にはいさゝかの変りも見せない．

かくて長安に入つた李白は天宝元年年四十二才[1]で玄宗皇帝に翰林待詔として仕える身になつたのである．当時玄宗は道教を奨励し，また李白のこれに対する信仰も相当の域に進んでいた．したがつてこのたびの推挙者は新旧両唐書[2]及び魏顥の李翰林集序[3]に伝えるところでは，道士呉筠，或いは賀知章或いは女道士の玉真公主であると言い，そのいずれも道教関係者であることが，従来と変つて注目される点である．先にも述べた魯仲連はもとより，これに類する張良などの道家的高風を欽慕したことは，彼の作品にもしばしば出る事であるから，このたびは已と先祖を同じくする唐室を助けて大功を立て功に誇らずして隠遁し，権力に恋恋たる側近を瞠若させ旧来の弊風を一新せんと彼等にたよつたものらしく察せられる．それゆえ宮廷に入つた李白の行為を検討するに，その依つて立つ基本精神においては在野の時と少しも変つていない．新旧両唐書[4]や范伝正[5]の伝えるところなどによると，毎日長安市中の飲屋で仲間と酒を飲んだ話，玄宗の面前においてすら酔いつぶれて水を掛けられ，やゝ醒めて筆を執るなり詩を作つた話，殿上で酔い高力士に靴を脱がせた話，酒中八仙人中の随一であつた話，白蓮池で玄宗が船遊びをした時，酔つてよろよろ船に上れず高力士に助けられた話などが強調され，すべて酔態の限りを尽して尊貴の何物たるかを解しない振舞である．これがもし凡俗の人間であるならば，必ず恩遇に恐懼感激して一段と緊張を覚えいやが上にも恭敬の念を深くする場で，従来の宮廷詩人達には絶えて見られない態度である．ところで世間の見方を示すものとして彼の集中に「李邕にたてまつる」と題する詩[6]がある．もつとも蕭士贇[7]は太白の作ではないようだと疑い，王琦[8]は若い時の作と見ておるようで一応問題にはされるがこの中の一節に

「時人見我恒殊調，見余大言皆冷笑」と世俗と調子を異にする自分，また大言壮語する自分を見て世の人は皆冷笑すると述べている．世俗と調子を異にするとは，無論こうした生活態度を言うもので，この詩がよし偽作であつたにせよ事実世間では冷笑の目で見ていたに違いない．しかし李白

1) 李太白文集輯註巻三十五　「李太白年譜」．
2) 舊唐書一百九十文苑下，新唐書二百二文藝中．
3) 李太白文集輯註巻三十一．
4) 舊唐書一百九十文苑下，新唐書二百二文藝中．
5) 李太白文集輯註巻三十一　「唐左拾遣翰林學士李公新墓碑并序」．
6) 同上巻九．
7) 分類補註李太白詩巻九　「上李邕」．
8) 李太白文集輯註巻三十五　「李太白年譜」の「天寳六載丁亥」の條．

自身からするならば，これらは決して無目的の生活行動ではなく，必ず心に期するものがあつてのことに相違ない．彼の作「玉壺吟」[1]の一節

「世人不識東方朔，大隠金門是謫仙.」はかゝる意識に立つて歌われたものである．つまり世人は東方朔の積りで宮中に入つた自分を知らずにいる．金馬門内なる宮中に大隠者然と構えているのが謫仙人たる自分だという心境に外ならない．又別の詩[2]には劉少府が自分を今の世の東方朔だと批評した旨述べて己を知る明を多とするものゝ如くである．彼の宮中における生活態度はかく大隠者の積りであるから青年時代より山に隠れた性格が変つておらず，人間社会の如何なる尊貴権勢も彼の前には通用しないわけである．一体東方朔は滑稽・諧謔・諷刺をもつて鳴らした漢の武帝時代の人であるが，これは可なり魅力的だつたと見えて集中によく出て来る．例えば南陵の常贇府に贈つた詩[3]の歌い出しには

「歳星入漢年，方朔見明主，調笑当時人，中天謝雲雨，一去麒麟閣，遂将朝市乖，故交不過門，秋草日上階」と歳星の化身たる東方朔が漢廷に入り当時の人を嘲笑したことを学ぶ所存であつたが，事志に違い宮中を去つたことが述べられて居る．そのほか司戸の役たる崔兄弟に贈つた詩[4]にも玄宗に用いられた己を東方朔に比して歌つている．これから察するに東方朔を慕う情は彼の出生にまつわる伝説[5]即ち母が太白星を夢見て彼を生み，これに因んで太白と字した事とは一筋の心理的流通があるように思うけれども，宮廷にあつて当時の人を嘲笑したところに李白が大いに共鳴欽慕の情を寄せたものであろう．

宮中に仕えた己を大隠者に比し，尊貴を眼中におかず，東方朔をもつて自任し，その滑稽・諧謔・諷刺を真似て数々の酔態を極める李白の態度は明かに抵抗表示で，いわゆる庶民的性格の現れと解せられよう．かゝる有様では周囲の権貴に忌まれ辞職に至るも当然と言わねばならぬ．

辞職は天宝三載[6]であつたが，その後李白は山西・山東・河北・河南方面に十年ばかりを過し，やがて江南に現れたのである．辞職した直後の事として唐才子伝[7]や歴世真仙体道通鑑[8]には，彼が華山に登る時例によつて酒に酔い，驢馬に跨つたまゝ華陰県の役所前を過ぎたところ長官に誰何されたので，これに応答し遂に長官をやりこめ大笑して立ち去つた話が載つて居て彼の性格の本質に触れている．又江南ではある時月夜に乗じ，崔宗之と舟で釆石から金陵まで行つた事がある．この時宮錦袍――宮中で着る錦の上衣を着，舟中で振り向きおどけて傍若無人に振舞つたと言う意味が旧唐書[9]に載つている．これは新唐書[10]や唐才子伝[11]・玄品錄[12]・歴世真仙体道通鑑[13]・等にも引かれている程に著名である．こうした振舞は人の意表に出た事として異常の注意を引いたものであろう．しかし宮錦袍を着てかく振舞つたところに，かつて権力に仕え自らの志望を達成出来なかつた己を自嘲する気分がないでもない．これら二つの話はまたいずれも彼の庶民的性格に関連づけてこそ解釈出来ることである．

以上は主として時の権力者に対する李白の抵抗意識から見られる庶民的性格である．しかし信仰の面からもその一端が窺われるのである．

前述の通り，彼が玄宗皇帝に謁見した際の推挙者は，或いは呉筠或いは賀知章或いは玉真公主と言われ確定出来かねるとしても，いずれも道教関係者で，これらの人々から特別な信頼を受けたこ

1) 李太白文集輯註巻七．
2) 同上巻十五　「留別西河劉少府」．
3) 同上巻十二　「書懐，贈南陵常贇府」．
4) 同上巻十　「贈崔司戶文昆季」．
5) 新唐書二百二文藝中．
6) 李太白文集輯註巻三十五　「李太白年譜」．
7) 唐才子傳二
8) 歴世眞仙体道通鑑三十七．
9) 舊唐書一百九十文苑下．
10) 新唐書二百二文藝中．
11) 唐才子傳二．
12) 玄品錄五．
13) 歴世眞仙体道通鑑三十七．

とが察せられる．これはなぜかと言うに要は彼自身特に道教を信じていた事に帰せられるようである．彼がまだ四川に居た頃の作に戴天山の道士を訪ねたが遇わずにしまつたと言う題の詩[1]がある．その道士の名は明かでないが，とにかく早くから道士との交りがあつた証拠にはなると思う．その後交渉があつたと見られる道士の名を挙げるならば呉筠[2]・司馬承禎[3]・元丹邱[4]・高尊師[5]・如貴[5]・胡紫陽[6]・元演[7]，女道士では玉真公主[8]・褚三清[9]・李騰空[10]であるが，中でも注目すべきは高尊師である．彼が長安を去つた後の動静については李陽冰の草堂集序[11]によれば，従祖に当る陳留採訪大使の李彦允について，北海の高天師に請い齊州の紫極宮で道籙を授つた旨見えている．道籙を授つたことは既に道教の奥義に達し得たしるしである．これは勿論李白に非常な感激となつたものであろう．集中にこの道籙を造つてくれた蓋寰に贈る謝意をこめた詩[12]のあることによつて知られる．彼ばかりでなく妻もまた恐らく彼の感化によつて道教を信仰したらしく，妻が廬山の女道士李騰空を尋ね行くのを見送つた詩[10]がある．彼の親友中の親友と言うべきものは元丹丘であろう．元丹丘に関する詩題は凡そ十一首[13]にも上つているが．中で彼を異姓でありながら兄弟であるとまで極言している[14]．李白の道教に対する信仰が如何に熱烈であつたかは，これらの事実が十分に証明していると思う．

道教は元来老子・荘子を宗とする道家に附会された宗教と言われる．その故であろうが道家的感興を歌うこと甚だ多く有名な古風五十九首[15]中でも既に十首を下らない．一方これと対蹠的立場をとる儒教に対する関心はそれ程ではなく，やゝもするとこれに皮肉を浴びせ勝ちである．例えば前記の古風五十九首中の第三十首[15]では老子の道が失われて，このため儒者までが悪事をすると歎き誇り，殊に魯儒を嘲ると題する詩[16]では，儒教発祥地の魯国における儒者を対象にして，時務に疎く徒らに礼容を重んじ気位高く構えることを嘲つて痛烈である．また傑作の一つ廬山謡[17]は侍御の盧虚舟に寄せた詩であるが，道家的感興のもとに歌いなされて，その歌い出しに

「我本楚狂人，鳳歌笑孔丘．」と言つて楚の狂接輿が孔子を嘲弄する気風に同調している．このようなわけで，儒家に対してはやゝもすれば批判的な目が向けられて辛辣である．

道教が宗教として世に現れたのは後漢時代で，民間信仰を伴い庶民の間にいろいろな形で深く根を下したと考える．先にも申した通り開祖を老子に附会した結果唐室も老子と同じく李姓であることより，この時代特に保護奨励されたものである．唐室の先祖が果して老子であるか否かは別として，こうした処置にも一面庶民を度外視し得なくなつた時勢が感得されるとともに，庶民の心を収攬して唐室に対する畏敬の念を起させるべく図つたことが看取される．一般に儒教は治者階級の必須的教養として尊重されたものであるが，道教は治者階級のみならず前述のような俗信との繋りをもつた意味において，より広く庶民階級の生活感情として親まれもし信仰されもしたのである．そ

1) 李太白文集輯註巻二十三「訪戴天山道士不遇」．
2) 舊唐書一百九十文苑下．李白と道教の關係については田中克己氏著李太白「七李白と道教」を參照されたい．
3) 分類補註李太白詩巻之一「大鵬賦幷序」「余昔于江陵，見天台司馬子微‥‥（蕭士贇曰，唐書司馬承禎字微，洛州人）」．
4) 李太白文集輯註巻七「西岳雲臺歌，送丹邱子」．
5) 同上巻十七　「奉餞高尊師如貴道士傳道籙畢歸北海」．
6) 同上巻二十五　「題隨州紫陽先生壁」．
7) 同上巻二十七　「冬夜隨州紫陽先生飡霞樓，送烟子元演隱仙城山序」．
8) 同上巻九　「玉眞公主別館苦雨，贈衛尉張卿，二首」．
9) 同上巻十八　「江上送女道士褚三清遊南岳」．
10) 同上巻二十九「送内尋廬山女道士李騰空，二首」．
11) 同上巻三十一．
12) 同上巻十　「訪道安陵，遇蓋寰，爲余造眞籙，臨別留贈」．
13) 同上巻二十三「與元丹邱方城寺談玄作」以下略．
14) 同上巻十五　「潁陽別元丹邱之淮陽」「吾將元夫子，異姓爲天倫，本無軒裳契，素以煙霞親」．
15) 同上巻二．
16) 同上巻二十五　「嘲魯儒」．
17) 同上巻十四　「廬山謠，寄盧侍御虚舟」．

れゆえ，李白の以上に述べたような道教に対する尊崇と儒家に対する批判精神の対立は，彼の庶民的性格に基づく感情の一側面を伝えるものと了解される．

次に遊俠の面から見ると，李白には遊俠少年の情態を詠んだものが少くない．「結客少年場行」[1]もこれで，中に遊俠少年が馬に乗つて俠客と遊び戯れ遂には市中で人をあやめるのであるが，実際目に映るよう歌われている．恐らくこれは彼自らの姿でもあつたに違いない．と言うのは彼も手ずから数人を刃にかけたと魏顥[2]が伝えているからである．ところで遊俠者の性格を始めて提示したのは史記の游俠列伝[3]であろう．その冒頭に韓非子の五蠹篇を引き知識階級たる儒者に対照して説明し，次に遊俠者の行は必ずしも尽く正義に合つているわけではないと前提してから，約束を重んじ己の生命を賭けて他人の困窮を救うものだと述べている事や列伝所載の事実から併せ考えると，遊俠者の性格が自然に浮び上つて来る．今日の眼からするならば要するに抵抗精神の持主で庶民の階層にあつて，時の権力者・支配者に対するのが本来の姿である．しかしこれが別の段階に入り，私利のため，権力者・支配者と手を握り庶民の生活を脅かす方向に堕落しては却つて庶民の敵で司馬遷の取上げる遊俠の本質ではない．

凡そ生死の場に出入する遊俠者の悪い部面として賭博行為がつきまとう．したがつて司馬遷が遊俠者の性格を述べるに当り，正義に外れる場合のあり得る事を前提とした意中にはこのような行為も入るわけである．さて「梁園の吟」[4]には組分けして酒を賭け遊び暮したことが彼の実際経験として述べられているが，より切実感を盛つた描写としては「猛虎行」[5]がある．これは例の楽府体の詩であるが詩中の言葉では，溧陽で張旭に留別するに際し作つたものゝようである．この中には李白が安祿山の乱を避けて宣城に至り，この地の太守と親交があつたことを語り，また時には自ら六博をなして賭博的享楽中にその壮心を慰めたさまが説かれている．彼がかゝる放縦の行をしきりに痛快がつたのは，尋常一様の士とその軌を異にする．蕭士贇[6]はこの詩を太白の作ではあるまいと疑つて種々理由を述べているが，主旨は倫理的でないことに尽きる．しかし王琦[7]が確かに太白の詩であろうと断じて細かに反証を挙げている程であるから，恐らく事実に違いない．かく賭けごとを享楽する面は彼のいわゆる鬱勃たる壮心を慰める刹那主義的手段で，つまり遊俠的実践の好ましからざる一例として意義づけられよう．

任俠者のよい部面は強きを挫き弱きを助ける態度であり行為で，これこそはその本質的性格である．「少年行」[8]に遊俠少年が府県の役人連を尽く門下の客となし，たとえ王侯に対しても平等の立場で交ることを称えている．唐の詩には遊俠の事が多く歌われるのは庶民の間にこのような自我意識をもつた層が勃興し始めたことを示していると思うが，前に述べた李白の権貴に対する抵抗はこうした讃美の中にいよいよ高まつたことだろう．江陽の宰（県令）陸調に贈つた詩[9]には，長安に居た時自ら遊俠の仲間に投じ，嘗て五陵の貴公子たる少年連の待ち伏せに遇つたことがあると述べ，衆人環視の中であはや大事に至ろうとしたが，あなたの事宜を得た処置に助けられたと深く感

1）李太白文集輯註巻四．
2）同上巻三十一　「李翰林集序」．
3）史記游俠列傳第六十四　「韓子曰，儒以文亂法，而俠以武犯禁，二者皆譏，而學士多稱於世云」「今游俠，其行雖不軌於正義，然其言必信，其行必果，已諾必誠，不愛其軀，赴士之阨困，既已存亡死生矣，而不矜其能，羞伐其德，蓋亦有足多者焉，且緩急人之所時有也」．
4）李太白文集輯註巻七　「梁園吟」．
5）同上巻六．
6）分類補註李太白詩巻六　「猛虎行」蕭士贇曰，按此詩似非太白之作，用事既無倫理，徒爾肆爲狂誕之辭，首尾不相應，脉絡不相貫串，語意斐率，悲歡失據，必是他人詩，竄入集中，歳久難別．
7）李太白文集輯註巻六　「猛虎行」琦按是詩當是天寶十五載之春，太白與張旭相遇於溧陽，而太白又將遨遊東越，與旭宴別而作也．
8）同上巻六．
9）同上巻十　「叙舊贈江陽宰陸調」．

謝の意を寄せている．果してどちらに言い分があつたのかこれだけでは勿論分らないが，いずれにしても彼の貴族階級に対する抵抗意識に基づく言動が招いたものであろう．

都使の劉某に贈つた詩[1]は，夜郎流謫の途に就くに当り経済的援助を乞うた作であるが，この中には，家に大酒飲みの食客連が多いので，この負債が重り返却に困つた様子が述べられている．生活に窮しながらも多くの食客を養うところに彼の任俠的性格が如実に現れているが，この交際性によつて遊俠仲間に身を投じた際における活躍振りが想起され，五陵の少年連につけ狙われたことも十分に肯けるのである．

弱者を助けると言う部面は既に述べた通り，戦争に否定的態度をとつて権力者を批判し，庶民の中でも殊にか弱い婦人に同情を寄せて歌い上げる態度に既に感ぜられる事ではあるが，ここでは別に一つの挿話から例を取る．これは前にも挙げた安州の長史裴某にたてまつつた書[2]の中に見える李白自身の言葉によつて知られるのである．

「曩昔東遊維揚，不逾一年，散金三十余万，有落魄公子，悉皆済之，此則是白之軽財好施也」とはその一節であるが，かく短期間に惜みなく三十余万金を費すところなどは遊俠者の気前よさであり，落魄者を救うのは弱者を助ける精神の発露である．李白は更に続けて次のように言つている．

「又昔与蜀中友人呉指南，同遊于楚，指南死于洞庭之上，白襌服慟哭，若喪天倫，炎月伏屍，泣尽而継之以血，行路聞者悉皆傷心，猛虎前臨堅守不動，遂権殯于湖側，便之金陵，数年来観，筋肉尚在，白雪泣持刄，躬身洗削，裹骨徒歩負之而趨，寝興攜持，無輟身手，遂丐貸営葬于鄂城之東，故郷路遙，魂魄無主，礼以遷窆，式昭朋情，此則是白存交重義也」

彼が王勧に贈つた詩[3]の中で知己こそは兄弟以上であると信ずる旨歌われているが，友人呉梓南の死を兄弟を失つたように傷む情や，数年の後種々の忍苦を経て借金してまで改葬する情は，いずれも知己に報い逆境者を助ける一片の俠気が作用しているのである．彼が大原に旅した時，郭子儀の人物を見抜き，その死罪を救つた話も李白の弱きを助ける俠気と見られる反面，既に述べた通り如何に人を観る明があつたを証明している．李白が永王璘の反乱に坐した際，その死罪を救つたのは外ならぬこの郭子儀で自らの官爵を代償に差出して進言したものであつたことは，新唐書[4]を始め諸書[5]に伝えるところである．

以上によつて李白の遊俠精神は単なる観念的壮語ではなく，実際に身についた性格とし存したことが分るであろう．前にも言及したことではあるが遊俠者は庶民が自我を己に見出した結果生じた階層で，唐時代の詩に多く現れて来るのは庶民勃興気運のしるしであると判断する．この時に当つて李白は特に遊俠者の仲間をもつて自認して食客を養い，時には貴族と衝突し，時には落伍者，薄幸者はたまた罪人に心からの協力を惜まなかつた．ゆえにこの游俠の面から論じ得た性格も明かに庶民的性格と言えよう．

たゞこゝに一つの問題がある．それは陶淵明で五斗米のため腰を折るを潔しとせず辞職して田園に隠棲したことは有名な話である．しかも自然・田園の観賞・酒興・詠史の詩情にある程度の共通点さえ見出せる．してみると一応類似した態度の詩人として差別出来かねるようであるが実はそうでなく，李白の一面には都市集団的庶民生活に裏づけられた激しい情熱が宿つている．それゆえにこそ彼は遊俠精神を実践し，且つ人を殺しもしたが，陶淵明には絶えて聞かぬことである．否陶淵明ばかりでなく李白の時代まで詩人にして人を殺したことは，殆んどない程に稀な事実である．先

1）李太白文集輯註巻十一 「贈劉都使」．
2）同上巻二十六 「上安州裴長史書」．
3）同上巻九 「鄴中贈王大勧入高鳳石門山幽居」．
4）新唐書二百二文藝中．
5）李太白文集輯註巻三十一 「李翰林別集序」．唐才子傳二．

の曹操が挙げられるけれども，彼は権力者としての腹いせから孔融を殺させたに過ぎない．唐に入つては宋子問が己の文名のため劉延芝を殺させたと伝えられるが，これは沈徳潜[1]も指摘した如く甚だ疑わしい．よしこれを認めたところで，いずれも自ら手を下して居ないことだけは明かで，李白の非常に特異な存在であることがはつきりする．陶淵明と李白には約三百年の距りがある．そこに庶民の自我の芽生えが次第に成長し，社会の形勢は彼を単なる田園詩人に止まらせなかつたのである．かく観ると李白は時代の人として，その目覚め行く過程における庶民の激しい性格が宿つたものであると信ぜられるのである．

李白の庶民的性格は要するに時代の動きに形成されたとは，これまで述べた事の要旨であつた．しかしどれ程敏感な心の持主であつても，時代の動きたゞそれだけで直ちにその人が形成されるとは限らない．試みに彼の家系に眼を向けると，果して時代の動きに敏感ならざるを得ない程に切実な宿命的条件を具えている．李陽冰の書いた草堂集序[2]に依るに

「李白字太白，隴西成紀人，涼武昭王暠九世孫，蟬聯珪組，世為顕著，中葉非罪，謫居条支，易姓与名，然自窮蟬至舜五世為庶，累世不大曜，亦可歎焉，神龍之始，逃帰蜀，……」

とあるが，つまり李白は涼の武昭王暠の九世の孫で先祖は代々官職を受けて著れたこと，中頃罪なくして流され条支に居り姓名を変えたこと，窮禅から五代の間は庶民で数代にわたり余り著れなかつたこと，神龍（唐の中宗の年号）の初逃げて蜀に帰つたことが知られる．武昭王暠は唐の高祖から七代前の祖で，興聖皇帝であるから李白は遠い一族ともなるわけである．しかし范伝正の書いた唐左拾遺翰林学士李公新墓碑[3]には彼の先祖に言及し

「……隋末多難，一房竄於砕葉，流離散落，隠易姓名，故自国朝已来，漏於属籍，神龍初潜還広漢，因僑為郡人，……」

と見えていか，がこれによつて隋末多難の際に，一家は砕葉に放逐されて流離し隠れて姓名を変えたこと，ゆえに唐朝になつてからはその属籍から漏れてしまつたこと，神龍の初に潜かに広漢に還り，これを機に僑居して郡人になつたこと等が知られる．さてこの二つの記事を合せ考えるに李白の先祖は唐室の一族ではあるが数奇の運命に翻弄されて国外に流浪し，数代にわたり庶民になつたこともあつたわけである．且つその移住した条支と言い砕葉と言いすべて西域で遠く中国を離れているから，定めしいばらの道であつたろうが，反面それだけ各地の人情や習俗にも見聞を広めたことは想像に難くなく，この間に形成された祖先の庶民的生活感情が自ずと一家の気風をなし，ひいては李白に影響しそのよつて立つ性格の基盤ともなつたものであろう．かくて彼自らの流浪とともに，社会の各層ことに庶民層に対する経験を一段と深め，恐しく幅の広い従来に見られぬ型の大詩人を形成したものであると結論せざるを得ない．

范伝正は李白に対しなみなみならぬ追慕の心を寄せた人である．李白の子孫を三四年尋ねたあげく，やつと二人の孫娘を探し当てたが二人ともそれぞれ農民の妻になつていたと前記の新墓碑に見える．続いて孫女の話として次のように述べている．

「父伯禽以貞元八年不禄而卒，有兄一人，出遊一十二年不知所在，父存無官，父歿為民，有兄不相保，為天下之窮人，無桑以自蚕，非不知機杼，無田以自力，非不知稼穡，況婦人不任布裙，糲

1) 唐詩別裁集巻五　劉希夷の作「代悲白頭翁」の註に「唐新語載宋之問爲此詩有佳句，因殺害希夷，而以此詩爲己作，此因之問品居下流，而以悪歸之，其實宋之詩高于劉，不用攘窃他人也，雑説不足憑，毎毎如此」．

2) 李太白文集輯註巻三十一　田中克己氏著李太白「二　生立ち」の中に詳しい考證がある．

3) 李太白文集輯註巻三十一．

食何所仰給，傭於農夫，救死而已，久不敢聞於県官，懼辱祖考，郷閭逼迫，忍耻来告」
これによれば父の伯禽は貞元八年官に仕えずして歿したこと，兄が一人居るけれども十二年前旅に出て行方不明なこと，父の存命中は官職なく父の歿後民となり，兄の助けも得られぬままに天下に取り残された窮人になつたこと，結局生命を繋ぐため農夫の妻になつたことなどが知られる．そこで范伝正は二人を哀れに思い士族に嫁入りさせようとしたところ，いずれも皆こう言つている．

「夫妻之道命也，亦分也，在孤窮既失身於下俚，仗威力乃求援於他門，生縦偸安，死何面目見大父於地下，欲敗其類，所不忍聞」

即ち夫妻の道は天命によつて定められたものであること，孤独困窮の結果身分を失つたからとて，人の威力をたよりに援けを求め，生きて偸安を貪つたら，死後地下の祖父に合せる顔のないことが強調されているのである．二孫女のこれからの言葉の端端は庶民になつたことを一家の宿命と心得ているようにも見える．この点李白の血を引く人の言葉として拙論の帰結に微妙な示唆を与えているとえ考え敢てこれに言及したわけである．

備考　本稿の要旨は1953年10月18日岡山大學で開催された日本中國學會で口頭發表したものである．
また昭和27年度文部省内地研究員として東京大學に派遣された際倉石武四郎先生について演習「唐の詩と詩人」（李白，杜甫，白居易）を聽講して御指導を得たことを感謝する．